

中間決算概況発表

経 常 利 益 1 5 4 百 万 円

中間純利益 1 0 3 百 万 円

J R 四国労組は、10月31日に開催された経営協議会において「平成28年度中間決算概況」について次のとおり説明を受けた。 【詳細は別紙資料を参照】

【営業概況】

高速バス輸送人員については、台風の影響による運休が9月に46便あったものの、前年7月の運休145便との対比では32%と少なく、また続行便の運行便数も前年に比べて99便増と多く設定できた。しかし、9月のシルバーウィーク期間は前年に比べ大幅な利用減により対前年比99%となり、高速バス部門の運送収入は、1,808,369千円（対前期比100.9%）となった。

一方、ローカルバス路線では、久万高原線と大柘線において試行していた自転車の積み込みサービスの開始や、高知市内エリアを中心に運行するバス会社で導入している「ＩＣカードですか」のサービス提供等を展開し、ローカルバス部門の運送収入は、45,911千円（対前期比103.8%）となった。

貸切バス事業では、徳島支店のみでの事業展開であるが、J R 四国ワープとの連携による旅行商品の設定と催行を展開してきた結果、運送収入は 18,917千円（対前期比142.3%）となった。

以上の結果、売上高 1,943,767千円（対前期比1.3%増）、営業利益 151,759千円（対前期比23.5%増）、経常利益 154,141千円（対前期比22.8%増）となり、法人税等を差し引いた中間純利益は103,516千円（対前期比0.0%減）となった。

J R 四国労組は、厳しい経営環境の中、引き続き「安全・安心運行」を第一義に、下期に向けての対処すべき課題解決を図り、収益拡大に向けた取り組みを推進するよう要請した。

また、会社より、老朽化に伴う観音寺営業所の事務所新築について、早急に現敷地内南側に移転を計画している旨の説明を受けた。

以 上

平成28年度中間決算概況について

平 成 2 8 年 1 0 月
ジェイアール四国バス株式会社

平成28年度の中間決算(期間：平成28年4月1日から平成28年9月30日まで)の概況について、お知らせいたします。

1 事業の経過及びその成果

(1) 営業概況

当事業年度におけるわが国の経済について、政府の9月発表の月例経済報告によると、「景気はこのところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている。先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復に向かうことが期待される。ただし、海外経済で弱さがみられており、我が国の景気が下押しされるリスクがある。海外経済の不確実性の高まりや金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。」などと報告されています。

こうした環境における当社の今期の主な営業概況は、次のとおりです。

4月1日には、各ドリーム号の乗車券とのセット商品である「ドリーム&東京メトロきっぷ」の有効期間をバス乗車日基準から、東京メトロまたは都営地下鉄の利用開始から48時間有効な乗り放題乗車券にリニューアルしました。

4月4日には、「バスタ新宿(新宿駅高速バスターミナル)」が供用開始となり、各ドリーム号の乗り入れに伴うダイヤ改正を行いました。

5月9日からは、阿波エクスプレス号大阪便の「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」先着便はこれまでの土日祝日のほか繁忙期の運行日をカレンダーで示す設定としました。

老朽化した2階建てバスについて、後継車種が製造されないことから、これまでの座席数33人(内3人はプレミアムシート)～38人の車両からハイデッカー型28人座席の車両に更新し、5月31日にはオリーブ松山号、6月1日にはドリーム高松号からそれぞれ使用開始しました。

高速バス輸送人員については、台風の影響による運休が9月に46便あったものの前年7月の運休145便との対比では、32%と少なかったことからの反動と続行便の運行便数も前年に比べて99便増と多く設定できたことなどもありましたが、9月のシルバーウィーク期間は前年に比べ大幅な利用減となり、対前年比99%に留まりました。

高速バス部門の運送収入は、1,808,369千円(対前期比100.9%)となりました。

一方、ローカルバス路線では、久万高原線と大柵線において試行していた自転車の積み込みサービスを4月11日からは指定の便、指定のバス停留所において開始す

ることとしました。

大栃線では、高知市内エリアを中心に運行するバス会社で導入している「ＩＣカードですか」のご利用の拡大に向けて、当社でも体制を整え、５月９日からサービスの提供が出来るようにしました。

９月１日には久万高原線の最終便等の時刻を下げるダイヤ改正を行いました。

１０月１日には、一日乗り放題きっぷの発売額を１,２００円に改定し、リニューアルしたきっぷのデザインとともに提供出来るようにしました。

ローカルバス部門の運送収入は、４５,９１１千円(対前期比１０３.８%)となりました。

貸切バス事業では、徳島支店のみでの事業展開に移行していますが、年度初には、ＪＲ四国ワープとの連携による旅行商品の設定と催行を行うほか、９月から１２月の期間の日帰りバスツアーの旅行を自社で企画・募集し、収入の確保に努めることとしています。

貸切バス部門の運送収入は １８,９１７千円（対前期比 １４２.３%）となりました。

安全安心の確保については、引き続き、ドライブレコーダデータの共有化と、乗務員研修やヒヤリハット報告の映像としての活用を図りました。

さらに、安全装置としてモバイルアイ装置（ふらつき防止及び車間距離警報）を１９両追加装備し、前年度分と合わせ５９両に装備できました。

４月末に開催されたＧ７香川・高松情報通信大臣会合に備えたバスジャック対応を関係者間で確認するほか、万一の場合には、自社バス車両の識別を容易とするために、車体屋根上に社内呼称の車両番号シールを貼り付け整備しました。

名古屋・東京方面に運行する２階建て夜行バスの更新となる車両５両に、エンジンルームの火災に備える自動消火装置を装着し、対策の継承としました。

運行管理者研修や指導運転係研修、若年運転係や事故惹起者等のフォローアップ研修などの継続開催を通じてエコ運転の実施や安全の確保についての意識改革、運転技量の向上に努めました。

一方、定年再雇用運転係を対象に、加齢に伴い機能が低下する運転能力を認識することで事故防止に役立てるべく、運転適性検査の一部を研修に採り入れるため、反応速度検査器及び深視力計を整備し、シニアスタッフ研修を実施しました。

運転係不足の対応として、平成２６年９月以来大型二種免許取得費用の支援制度を継続しており、運転係の要員数については、全社的にはほぼ充足しましたので、現在は随時の募集としております。

これらの取り組みで、自動車事故件数は２１件、対前期１件減少となりました。

以上の結果、売上高 １,９４３,７６７千円（対前期比 １.３%増）、営業利益 １５１,７５９千円（対前期比 ２３.５%増）、経常利益 １５４,１４１千円（対前期比 ２２.８%増）となり、法人税等を差し引いた中間純利益は１０３,５１６千円（対前期比０.０%減）となりました。

2 当社が対処すべき課題

安全方針である「安全綱領」の下「安全・安心輸送の確立」に向け全社員がプロ意識に徹し、お客様に安心してご乗車して頂ける体制作りをさらに強化してまいります。

業務運営の効率化や運行部門と販売部門のコスト削減については、平成28年度は、車両修繕計画と連携して修繕業務委託契約の見直しによる実施を開始しており、その効果を追跡把握します。

ひかり電話の機能を活用する社内インターネットを構築することで、高速バス電話予約センター業務については、受付の一元化を可能とし、適正な要員配置の可能性を求め、効率的運営を模索していきます。

基幹的事業である高速バス路線の収益性の向上に取り組み、補完的事業の模索などにより、これからの高速バス事業に向けて、強靱な経営体質づくりを目指します。

当面、観音寺エクスプレス号の収支改善として一部便の週間における特定日の運行に切り替える等のダイヤ改正を行うなかで、効率的な運営の模索を行います。

また、徳島支店での貸切バスについては、JR四国ワープとの連携に加え自社におけるバスツアー商品作りと募集と催行を行う中で、収支の改善度合いを見極めることとします。

さらに、ローカルバスについては、久万高原線の路線の一部区間を三坂道路による経路変更と既設バス停留所の廃止、さらに路線の久万高原～落出の区間の路線廃止に向けた関係機関との調整など、これらを課題とし、実施に向けた取り組みを行います。

3 設備投資の状況

当上半期中に実施した設備投資総額は 472,121 千円であり、内容は次のとおりであります。

・高速バス老朽取替	12両	447,538千円
・貸切バス車内設備整備	2両	5,950千円
・ひかりネットワーク設備整備		7,380千円

4 平成29年3月期の業績予想

(単位：千円)

科 目	平成27年度 決算実績 A	平成28年度 見込計画 B	増減額 B-A	主な増減理由
営業収益	3,880,417	3,901,011	20,594	京阪神便増等
営業利益	314,939	245,788	△69,151	減価償却費増等
経常利益	319,619	249,936	△69,683	
当期純利益	244,763	190,440	△54,323	

【参考資料】

平成28年度中間決算収支状況

会社名 ジェイアール四国バス株式会社
(単位:百万円、単位未満切捨)

項 目	28年度中間決算	27年度中間決算	増 減	対前期比	記 事
営 業 収 益	1,943	1,918	24	101.3	
乗 合 収 入	1,854	1,836	18	101.0	
一 般 線	45	44	1	103.8	ローカル利用増等
高 速 線	1,808	1,792	16	100.9	京阪神便増等
貸 切 収 入	18	13	5	142.3	運行両数 220→279
運 輸 雑 収 入	70	69	1	101.9	広告収入及びその他雑収入増等
関連事業収入					
営 業 費 用	1,792	1,795	△ 3	99.8	
人 件 費	786	788	△ 1	99.8	社員△14,183 契約社員12,801
動 力 費	150	181	△ 30	83.0	単価差△30,590(@89.78→@74.41) 及び業務量・消費率差△193
業 務 費	571	556	15	102.9	被服費及び保険料増等
修 繕 費	87	82	5	106.1	修繕波動等
諸 税	9	15	△ 6	58.8	事業税減等
減 価 償 却 費	185	172	13	107.6	営業用自動車償却費増等
営 業 損 益	151	122	28	123.5	
営 業 外 損 益	2	2	0	88.6	貸付利息及び支払利息
経 常 損 益	154	125	28	122.8	
特 別 損 益	12	33	△ 21	785.7	固定資産売却益減等
税引前当期利益	166	159	7	104.7	
法 人 税 等	68	65	3	104.6	
法人税等調整額	△ 5	△ 9	4	—	
中 間 純 利 益	103	103	0	100.0	

【参考資料】

平成28年度第2-四半期営業概況

○運輸収入

高速バス部門は9月に台風16号の影響で46便運休しましたが前年上期の145便運休より大幅に少なかったことや、続行便を99便多く運行したことにより9月のシルバーウィークの利用減を補い対前年101%となりました。系統別では徳島・愛媛～京阪神、四国島内が好調でした。路線別では高松～関空が輸送力調整、徳島～新神戸が競合他社の撤退、松山～京阪神が徳島道バス停留所に停車、高松及び松山～東京が続行便運行増により好調でした。ローカル・貸切部門は合計で8百万円増となりました。

○高速バス輸送人員（便当たり人員）

便当たりの人員では、京阪神系統が香川が対前年95%、徳島が同103%、高知が同94%、愛媛が同103%であり4県合計では対前年99%でした。その他の系統も低調なご利用状況でありましたが、東京方面の夜行バス系統は1月に起きたスキーバス事故の影響が和らいだ傾向にあり対前年94%（第1四半期90%）まで回復しました。名古屋系統は車種の変更や競合他社の運賃施策の影響を受け対前年81%となりました。

◎運輸収入

（単位：百万円、%）

輸送別	第2-四半期累計				
	本年	前年	対比	計画	計画比
高速	1,808	1,792	101%	1,792	101%
ローカル	46	44	104%	43	106%
貸切	19	13	142%	22	84%
合計	1,873	1,850	101%	1,858	101%

○高速バス収入内訳

（単位：百万円、人）

		第2-四半期累計			便当人員（第2-四半期累計）		
		本年	前年	前年比	本年	前年	前年比
高松EXP	高松～大阪	126	129	97%	17.1	18.0	95%
	高松～神戸	83	84	98%	14.9	15.5	96%
	高松～京都	56	55	101%	17.5	18.1	97%
	高松EXP計	264	269	98%	16.4	17.2	95%
	観音寺・坂出～神戸・大阪	138	146	95%	15.7	16.4	96%
	香川～京阪神計	403	415	97%	16.3	17.1	95%
	高松～関空	20	18	114%	12.7	11.3	112%
阿波EXP	徳島～大阪	165	164	101%	20.8	20.4	102%
	徳島～神戸	148	139	107%	23.6	22.4	105%
	徳島～京都	46	47	99%	20.0	20.5	98%
	阿波EXP計	360	350	103%	21.7	21.1	103%
	須崎・高知～京阪神	295	295	100%	19.2	20.4	94%
	八幡浜・松山～京阪神	185	169	110%	16.1	15.6	103%
岡山	高知～岡山	16	17	98%	15.4	15.8	97%
	松山～岡山	28	28	99%	15.0	15.3	98%
	岡山計	44	45	99%	15.2	15.6	97%
	高松～広島	42	45	94%	17.5	18.6	94%
四国島内	高松～高知	40	40	100%	13.1	13.3	98%
	高松～松山	83	82	100%	13.7	13.8	99%
	徳島～松山	38	38	101%	15.5	15.7	99%
	徳島～高知	15	15	103%	15.2	15.2	100%
	松山～高知	74	73	101%	18.3	18.6	98%
	四国島内計	250	249	101%	14.5	14.6	99%
東京・名古屋	松山～東京	51	47	107%	25.0	25.6	98%
	高知～東京	48	48	100%	26.7	28.5	94%
	観音寺・高松～東京	87	84	104%	25.9	28.1	92%
	阿南・徳島～東京	0	0	94%	—	—	—
	松山・高松・徳島～名古屋	23	28	81%	21.0	26.0	81%
	東京・名古屋計	209	208	100%	24.6	26.8	92%